

白山ふるさと文学賞

第十二回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生 小説の部 優秀賞

「カスミソウ」

松任中学校三年

北野^{きたの}

心結^{みゆ}

今日で二月と十七日かあ……。右手で傘を持って左手で指を折りながら、中学校へと続く坂を上る。雨の日の通学路は意外と嫌いじゃないし、雨に打たれる草花はきらきらして結構好き。あれはラベンダー。花言葉は「期待」。お母さんが花屋だから、この前教えてくれた。それにしても、毎日本当に綺麗……。

私は小林美風。中学三年生。お母さんの影響で花が好き。坂を上った先にある中学校に通っている。校門の前に着くと、雨が上がった。振り返ると広がる、美しい景色が私の学校のチャームポイント。さて、二月十七日目の今日は……はあ、やっぱり見える。「宿題やってない」それは残念。「今日も山本君かつこいい」うーん、共感できないかも。「給食何だろ？」確かカレーだった気がする。——そう、私は人の気持ちが見えるのだ。今年の四月四日、私の誕生日から見えるようになった。頭の上に吹き出しが出ていて、その人の今の気持ちの中継されるように書かれる。この不思議な力に身についてから、二週間だけは楽しかった。最初は罪悪感があったけど、書かれていることに心の中で答えるのが楽しかった。しかし、吹き出しを見て相手の気持ちを確認しながら会話をしたり、自分が嫌われていないか毎日確認したり。だんだん美風はそういう人との関わり方になってしまっていた。自分が自分でなくなっていることに気づかずに。

水森：わかな？なんだろう。同じクラスのこの子だけは吹き出しが出ていない。何度瞬きしても、真横を通ってみても見えない。いつも一人でいるからちよっぴり近寄り難いけど、嬉しいかもしれない、結構。

それから一週間もたたないうちに突然わかなの地持ちが見えるようになった。「カスミソウ」たったそれだけ？その次の日もそのまた次の日も変わらないままだった。他の人は毎日何回も変わるのに。美風はわかなを自然と目で追うようになっていた。初夏の風が吹き始め、新しい何かが始まりそうな予感がした。

夏休みに入った。お母さんの花屋「&ブーケ」の手伝いをして、勉強をして、アイスを食べるを繰り返して過ごした。日差し強いある日。

「いらつしやいませ。」

「あつ。」

「えつ。」

わかなだった。一瞬時が止まったものの、お互い何も気づいていないふりをした。

「カスミソウを花束にして下さい。」

カスミソウだけを花束に？可愛い印象で、メインの花を際立たせているイメージが強い。本当にカスミソウが好きなんだな。お母さんのつくった花束は、花への愛情が込められているような気がして心が温かくなる。その花束を受け取ったわかなはかすかに微笑んだ。帰ってしまう、待って、話したいのに。その時、そつとお母さんが私の背中に触れた。温かい手だった。

「待って！」

「何？」

「カスミソウ、好きなの？」

カスミソウの香りが漂う。わかなは口角を少し上げて

「儂いから、好き。」

二期。わかなが花壇係になったから、もう一枠に即立候補した。露骨に嫌な顔をされたが、吹き出しは「カスミソウ」のままだった。

「花いい匂いだね。」

「そうだね。」

「カスミソウ好きなんだよね。」

「うん。」

うーん。なぜこんなに会話が広がらないのか。そうだ！

「花言葉当てゲームしようよ。交互に花の名前を言って、その花の花

言葉を答えるの。先に答えられなかった方が負け。」

わかかなの顔が明るくなった。よし！

「じゃあ、わたしから。ギンモクセイ。」

「初恋。」

わかかなは即答だった。悔しい。

「簡単だよ。次は私。カーネーション。」

「無垢で深い愛。」

「青色は？」

「え？そんなのずるい！」

「正解は、永遠の幸福でした。まだまだだね。」

こんなわかかなの顔、初めて見た。声からは分からない、花が咲いたような笑顔が胸に刺さった。あれ？私は初めて吹き出しのことを考えなかった。相手の気持ちを確認しなかった。そっか、気持ちが見えないからこそ伝え合うんだ。見えないからこそ難しく、でも、どうにかして深めていくんだ。それが、それがそれが大事で、美しいんだ。わかかな、不思議な力、教えてくれてありがとう。美風が初めてこの力に感謝した瞬間だった。きらきらとした花々の香りが、美風とわかかなを包み込んでいた。

バカ。美風のバカ。なんで、なんでバレちゃったの——。

最初の印象は変な人。新学期当初からキョロキョロしていて、変な人だとずっと思っていた。五月二十一日。私水森わかかなの誕生日。びっくりした。突然人の気持ちが見えるようになったのだから。混乱した私は原因を考えたが、何も分からなかった。ただ、あの子、小林美風も人の気持ちが見えるのかもしれない、唯一あの子の気持ちだけが見えなかったから。そんな期待を抱くようになった。小学校を卒業し、すぐには県外に引っ越した私はもちろん誰のことも知らず、そのうえ人見知りだから、友達といえる人なんて誰もいなかった。でも、日差しが強い今日、美風は声をかけてくれた。理由は理想とは違うかもしれないけど、それでも私は嬉しかった。二学期に入り、美風と仲良くなれた。仲良くなれて数日後、美風の誕生日を聞いた時確信した。四月四日と五月二十一日、どちらも誕生日がカスミソウなのだ。私の大好きなカスミソウが二人を繋いでくれたなんて。これ以上嬉しいことはなかった。美風にはまだ内緒にしておこう。そう考えながら鼻歌交じりで美風の元へ向かった。こんな毎日が続くと思っていたのに。

「ねえ。人の気持ち見えてるの？」

「え…なんで？」

最悪だ。クラスメイトにばれてしまった。なんて言ったらいいの。

「最初からおかしいと思ってたんだよね。キョロキョロしてるし、目が合わないし。そういうことだったんだね。」

「…。」

そうだよ。嫌だよ。わかかなは？いない？よかった。わかかなにだけは嫌われたくないから。

「ごめんなさい。」

これしか言葉が見つからなかった。みんなの視線に耐えられず、私は足早に教室を出た。

終礼前で良かった。もう学校行けないよ。なぜかいつもの花壇の前に来ていた。本当はあの子を待っていたくせに。

「美風！」

本当に来てくれた。涙抑えられそうにないや。ごめんね、わかかな。

なんでこうなってしまうの。美風のバカ。私がいなかったせいで何も助けてあげられなかった。私も見えるのに。一番バカなのは私だ。

ごめん、美風。

「美風！」

「わかかなーあ、何も無いよ。」

「そんな嘘通じるわけないでしょ？ごめん。美風。」

「どうしてわかなが泣くの？」

「本当は私も誕生日から見えるようになったの。人の気持ち。カスミソウが誕生花の人は見えるようになるみたい。二人の共通点が大好きなカスミソウっていうのが嬉しくて仕方なくて驚かせたくてまだ内緒にしていたの。ごめん。」

こんな形で伝える事になるとは…。でも、一番辛いのは美風だ。「謝らないでわかな。見えることは苦痛だった。でもね、私はわかなくこの不思議な力のおかげで人と関わる本当の意味っていうか、美しさみたいなものを知れたの。そうだったんだね。私もとっても嬉しい！」

なんで、なんでこんなに素敵な人なんだろう。心が温かくなった。あの時と同じ温かさだ。花束をもらった瞬間に広がったあの温かさ。ありがとう、美風。本当に。泣いているのか笑っているのか分からない二人は、お互いの顔を見て思わず吹き出してしまった。

翌日。視線が怖い。吹き出しも見たくない。下を向くことしかできない。始めて美風は校門の前で振り向かなかった。より一層美しい景色だったというのに。

「美風おはよう。」

「おはようわかな。」

頑張ろう。何も起こりませんように。そう願った。

終礼前、その何かが起こった。

「今日も見えるの？やめて欲しい。怖くて安心して生活できないの。」
正論だ。私だっで見られたくないはず。我慢しよう…。

「私も実は見えるの。でも、気持ちが見えるからってなんかした？美風が見えるようになって数カ月経つけど、みんなになんかしたことある？」

わかな？

「美風はずっと悩んでいた。それに見たことを誰にも一回も言ったこと

ないし、何もしてない。どうしたら元に戻るか分からないけど、戻るまで美風も私もみんなが嫌がることは絶対しないから。この数カ月を見て信じてほしい、です。」

なんで、わかな。わかなはそれでいいの。ごめん。でも、ありがとう。わかなと友達になれて本当に良かった。

「ごめん一人とも。確かにそうだよ。まだちょっと抵抗はあるけど、絶対信じる。」

クラスみんなの目を見て分かった。本当に信じてくれている。ありがとう。

それから二人は毎日安心して過ごした。吹き出しを確認することはなくなつたし、みんなも前と同じように接してくれた。わかなってすごい。そんなわかなに聞きたいことがあった。

「わかな、どうしてカスミソウが好きなの？」

「儂いからだよ。」

「他にもあるでしょ。」

「うーん。言葉にするのは難しいな。最初はいつも花束にあるなと思って。でもカスミソウがないとなんかダメなの。目立つことはあまりないけどでも必要で欠かせないっていうか。そういうところが好きで、そういう人になりたくて。そして、どこか消えてしまいうさそうで儂いところも好きなんだよね。」

圧倒されてしまった。本物だ…！

「美風の好きな花は何？」

「まだ言わないでおく。」

「何それ！」

楽しみにしていてね、わかな。早く春が来ないかな。十一月、肌寒くなった風を感じながら、帰っていく二人であった。

追いつみの三カ月が過ぎてもうすぐ春。無事受験に合格した二人は、クラスのみんなと最後の一週間を楽しんでいた。誰一人欠かさず

に、みんなが笑顔だった。

そして迎えた卒業式当日。緊張して肩が上がっている美風をわかなが笑った。卒業式は順調に進みピアノの音色と共に終わったが、二人とも卒業した実感が全くなかった。その後、美風とわかなが一緒に過ごした。

「わかな、花を交換しよう。自分の一番好きな花を買ってきて、交換しよう。」

「わかった！二十分後にまたここで。」

私はもちろんカスミソウ。大好きな人に贈る大好きな花。喜んでくれるかな。

「おまたせ！」

二人が戻ってきた場所はやっぱり中学校の花壇だった。

「せーので出そう。せーの！」

白のカスミソウそして、オレンジの薔薇が五本。二人は交換した。風に揺られる花々は歌っているよう。

「春だね。」

「うん。風が心地良い。飛んでいけそう。」

「その時は私も一緒に飛んでいこうかな。」

「それいい！」

当然、花言葉は美風もわかながも知っている。「感謝」の白いカスミソウ、「信頼」のオレンジの薔薇、そして五本の薔薇は「あなたに出会えた心からの喜び」。あえて触れないのはお互い恥ずかしいからだろうか。ちよっぴり不思議な力があると二人を引き寄せた。これは偶然？どこかもどかしくて、でも大好きで。そんな二人になつてくれて心底嬉しい不思議な力であった。二人が高校一年生になつて迎えた誕生日、その力はぼつりと消えてしまった。さて、このちよっぴり不思議な力はどこへ行ってしまったのでしょうか。今年の誕生日、ちよっぴり不思議な力が身についていないか確認してみては？

